

論文審査の結果の要旨および担当者

報告番号

※ 甲 第

号

氏

名

于 劭賛

論 文 題 目

Nominative-Accusative Asymmetry in the Processing of
Case-Drop Sentences in Japanese and Korean

(日本語及び韓国語の格標識脱落文の処理における主格・対
格の非対称性)

論文審査担当者

主査 名古屋大学 教授 玉岡 賀津雄

委員 名古屋大学 教授 堀江 薫

委員 名古屋大学 准教授 村尾 玲美

委員 名古屋大学 准教授 三輪 晃司

論文審査の結果の要旨

本博士論文の口述試験を、2021年1月25日午後1時から3時まで ZOOM で開催した。学位申請者から博士論文の内容に関して説明した後、審査員から質疑応答が行われた。本論文は、質問紙調査、視線計測、脳波の3つの手法を使って、日本語と韓国語の格助詞脱落現象を主格と対格に限定して実証的に検証した研究である。言語学における先行研究を参照して、神経言語学モデルの「動作主識別方略」に基づいた仮説を実証していくというきわめて論理的な流れの論文である。実験の報告も、仮説、課題、分析、考察という実証手順が整然と分かり易く記述されている。また、今後の研究についても明瞭に示されており、さらなる研究の発展が期待できる博士論文である。一つの博論の中で、視線計測と脳波という2つの最先端の研究手法を使ったこと自体でも高く評価できるが、さらに最新の統計解析法であるベイズ統計学を駆使した点でも、学術的にきわめてレベルの高い博士論文である。

日韓両言語の格助詞脱落現象において共通して挙げられるのは、主格助詞脱落と対格助詞脱落の非対称性である。これまでの理論的研究やコーパスに基づいた研究では、両言語において、主格助詞の脱落は対格助詞の脱落と比べて頻度が比較的に低い他、容認度も低いといわれている。言語処理システムの目的が項の区別だけであると考えれば、主格か対格のどちらか一つの格助詞さえ明示すれば、残りを推測できるので十分であると仮定される。それなら、主格助詞と対格助詞の脱落の頻度および容認度は同程度のはずである。しかし、日韓両言語における主格助詞と対格助詞の脱落は非対称的であるといわれている。その理由として、神経言語学モデルの eADM (extended argument dependency model) で主張する「動作主識別方略」が考えられる。言語理解のプロセスで、主語(動作主)と目的語(被動作主)の識別は根本的に非対称的であり、主語の識別が中心であるという仮説である。言語システムの目的は、単なる項の区別だけではなく、主語(動作主)をできるだけ迅速かつ曖昧性をなくして特定することが求められているとする。したがって、主語の典型性が低い場合や、主語の役割付与に際して複数の名詞句による競合が存在する場合には、主語が識別し難くなり、文処理において困難が生じることが予想される。会話コーパスにおいて、主格助詞の脱落は、主語の典型性に影響するため、その頻度と容認度が比較的低いのは、動作主識別方略で解釈できる。

本論文では、日本語と韓国語における格助詞脱落現象を3つの実験で考察している。第1に、文容認度調査である。これまで主に研究者の内省で議論されてきた主格助詞脱落と対格助詞脱落の容認度の相違を日本語母語話者31名と、韓国語母語話者25名(韓国・ソウルの大学生)に聞いて実証的に調べている。その結果、正順語順のSOV(主語・目的語・動詞)の場合は、日韓両言語ともに、主格助詞脱落の容認度は対格助詞脱落の容認度よりも低いことが実証された。かき混ぜ語順のOSVの場合は、日本語では、主格助詞脱落と対格助詞脱落で顕著な差が見られなかった。それに対し、韓

論文審査の結果の要旨

国語では、主格助詞脱落の容認度が比較的低いことが確認された。先行研究では、OSVの使用頻度が低いため、主格助詞脱落と対格助詞脱落の非対称性を、語順別に十分に検討しなかった。本論文では、SOV語順における主格・対格助詞脱落の非対称性を日韓両言語で検証し、さらにOSV語順における言語間の違いを観測した。

第2に、視線計測の実験である。質問紙調査で、主格・対格助詞脱落の非対称性が確認されたため、格助詞脱落文がリアルタイムでどのように理解されているかを、さらに韓国語母語話者30名に対する視線計測実験で調べている。先行研究と質問紙調査の結果から、主格助詞脱落文の処理が比較的困難であることが予測される。しかし、視線計測の結果、主格・対格脱落文の反応時間の差は見られなかった。その代わりに、2つの名詞句への視線停留時間に「トレード・オフ」効果がみられた。格助詞の揃った文を基準とすると、格助詞脱落文の2つの名詞句のうち、格助詞のない名詞句への視線停留時間は格助詞の揃った文の場合より短かった。一方、格助詞の付いた名詞句への視線停留時間は格助詞の揃った文の場合よりも長かった。このパターンは、被験者が一方の名詞句の格助詞の情報を利用して、もう一方の無助詞の名詞句の役割を推定・判断する方略を取っていることを示唆している。格助詞のない目的語の読み時間がより短くなったものの、格助詞の付いた主語の読み時間に遅延はみられず格助詞の揃った文の場合と同じであった。これは、主語の典型性が損なわれていないと同時に、目的語が無生物であり競合が存在しないためであろうと考えられる。

第3に、脳波の実験である。日本語母語話者35名に対してSOV語順に絞って、主格助詞および対格助詞脱落文の処理における脳波を測定した。実験の結果、文頭の名詞句（主語）を処理する際、主格助詞脱落文は550-900msの時間窓で前頭部Fzにおいて正の電位変化を誘発した。これは無助詞の主語に遭遇した際の意外性を反映すると考えられる。2番目に来る名詞句（目的語）を処理する際、無生目的語の場合は、格助詞脱落文と格助詞の揃った文で顕著な差が認められなかった。これは、主語の特定における競合は存在しないので、過剰な処理負荷は生じないという動作主識別方略の仮説と合致する。一方、有生目的語の場合は、主語と目的語の両名詞の有生性が対照できるので、格助詞脱落文と格助詞の揃った文との差はみられた。主格助詞脱落文の場合は、目的語に格助詞が付いているにも拘わらず、300ms-900msの間に中心部Czで負の変化を起こした。対格が明示されているのに、大きな処理負荷を避けられなかったのは、動作主識別方略の予測通り、主語が項識別の中心であるためだと考えられる。

審査員の質疑に対して、理論、仮説、実証方法、実験手法、統計解析について、学位申請者からきわめて適切で明瞭な回答が得られた。また、質疑応答と通して、学位申請者が、視線計測と脳波およびベーズ統計によく精通していることも確認できた。全体として本論文は質量ともに博士課程後期の学位論文としての基準を十分に満たしていると審査委員会の全員が判断した。したがって、本論文を合格とした。